説教要旨『生涯の日を正しく数える』

詩篇　９０編１～１７節

「詩篇」は、人間が持つ様々な感情や願望を神の前に露わにさらけ出した記録です。嬉しい時、悲しい時、苦しい時、平穏な時、落ち込んでいる時、怒っている時、笑っている時、泣いている時…人生のありとあらゆる場面において、詩篇の詩は私たちの心情を代弁してくれます。本日の詩篇 90 編もまた、人間の生涯を振り返ってみた時に感じた、ありのままの心情をさらけ出しています。「朝が来れば、人は草のように移ろいます。…健やかな人が八十年を数えても、得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります」という儚さや刹那さ。「あなたの怒りにわたしたちは絶え入り、あなたの憤りに恐れます。あなたはわたしたちの罪を御前に、隠れた罪を御顔の光の中に置かれます」という罪責の念。そうかと思えば、「あなたがわたしたちを苦しめられた日々と苦難に遭わされた年月を思って、わたしたちに喜びを返してください」という、明るい未来に生きたいと願う叫びや希望をも抱いています。人の生涯やその時々の心情は移ろいやすいものであることを改めて感じさせられます。しかし、だからこそ、詩篇は「生涯の日を正しく数えるように教えてください」と神に祈るのでした。

詩篇は「神」を、「代々にわたしたちの宿るところ」、「大地が、人の世が、生み出される前から、世々とこしえに（ある存在）」として捉えています。また、「千年といえども（神の）御目には、昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません」とも感じ取っています。作家の内田樹さんは、人間に備わっている宗教性について「世界の創造に対して自分は絶対的に遅れている、と感じる心のことだ」と表現しています。詩篇の著者もまた、自分の生涯や心情の移ろいやすさに揺さぶられながらも、しかしその中で、「大地が、人の世が生み出される前から、世々とこしえに」ある神の圧倒的な存在感を確かに感じています。それ故、悲観的にならざるを得ない現実のなかにも、未だ生涯の日を正しく数え切れていないであろう自分の姿や神の御業に対する自分の捉え方が絶対的に遅れているのであろうことを見据えることができ、「あなたの僕らを力づけて下さい。朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ、生涯、喜び歌い、喜び祝わせて下さい」となお祈り求め続けることが出来たのではないでしょうか。私達には捉え切れない生涯の日々、そして、たとえ人生道半ばとしか思えない死の時があったとしても、その全てを神の眼差しから受け止め直せる道がすでに拓かれていることを詩篇は教えてくれています。

（文責：望月達朗牧師）